

母子保健における情報の整理と育児への応用に 関する研究

総括報告者 巷野悟郎¹⁾

研究協力者 小林祐子²⁾ 狩野順子³⁾ 犬飼靖光⁴⁾ 広野優子⁵⁾ 山岡テイ⁶⁾
白鳥元雄⁷⁾ 山中龍宏⁸⁾ 榊原洋一⁹⁾ 近藤洋子¹⁰⁾ 吉田弘道¹⁾
中澤恵子¹⁾ 植松紀子¹⁾ 太田百合子¹⁾

【要約】育児はごく普通の生活のなかで行われている。母親は、地域社会でいろいろな人の知恵を借りながら、立派に育児をなしてあげていた。しかし近頃は育児環境が孤立化してきたために、育児の常識を知らないままに母親になるものが増加してきている。日常の育児相談・育児指導などで母親の育児を観察したり、また、質問項目を整理すると、子育ての基本の知識がゼロというような例に遭遇することさえある。

一方マスコミを通じての育児情報が氾濫している。しかしその多くは、衆目を意識した内容であるから、母親は特殊な育児情報に取り囲まれているといっても言い過ぎではないであろう。即ち当たり前の育児知識が希薄であり、特殊な情報を育児常識として子育てが行われているという現状である。

そこで本研究では、母親が学校教育を受けたときの保健と家庭科の授業にまでさかのぼって調査し、また現在の育児常識の実態を分析した。そのうえで現状の育児情報のあり方を整理し、これからの保健指導のあり方について検討した。

見出し語：育児情報 学校教育 保健 家庭科 電話相談

¹⁾ こどもの城小児保健部 ²⁾ 板橋保健所 ³⁾ 志村保健所 ⁴⁾ 日本保育協会 ⁵⁾ デイテル・サービス(株)

⁶⁾ 情報教育研究所 ⁷⁾ 聖徳大学児童学科 ⁸⁾ 焼津市立総合病院小児科 ⁹⁾ 東京大学小児科

¹⁰⁾ 玉川大学文学部教育学科

【1】学校教育の中で、母子保健に関する知識はどのように習得されているか

大学一年生を対象として、高等学校時代の「保健」と「家庭科」についての習得状況と「育児経験」の実態調査を行った。(調査対象学生数525名)

「保健」を履修した501名についての授業の実施状況は、時間割に組み込まれていたものが94.0%で最も多かったが、ある時期集中的に行った3.4%、体育の時間に雨が降ったとき2.2%であった。

授業形態：93.6%が講義が中心で講義と実習を合わせた内容は4.2%。

担当した教師：体育と兼任が74.5%、保健専任15.0%、その他と兼務1.2%で、わからない・不明9.4%。

教科書の修了状況：すべて学習し終わったものは6.2%、ほとんど修了したものが48.1%、一部しか終わらなかったもの36.7%。

「家庭科」は全体の9.5%、女子の1.7%が高校では履修していなかった。男子5名のうちで、家庭科を履修していたのは3名。

高校三年間のうち、二年間授業のあったものは57.3%と最も多く、単一学年のみは12.2%。

家庭科を履修した471名について、授業の形式や内容をみると、男女別々の形態が97.7%。

授業形態：講義と実習によるものが93.0%で、講義中心は5.1%。

担当教師：家庭科専任81.5%、その他と兼務2.3%、わからない・不明16.2%。

教科書の終了状況：すべて学習し終わったもの5.1%、ほとんど終了したものの52.0%、一部し

か終わらなかったもの34.8%。

保健・育児知識の情報源はどこからか：「発育・発達」「人体のしくみ」「ホルモン」「性の発達」などは学校の教科書から、マスコミからの情報が比較的多かったのは「煙草の害」「アルコール・麻薬」「避妊・人工妊娠中絶」。

「赤ちゃんの世話」や「日常の病気」に関する情報は、親やきょうだいなど親族から得たとするものが多かった。

今まで知識を得ていないとする割合が高かった項目は、「救急法」「伝染病予防」「成人病予防」「日常の病気」「赤ちゃんの世話」である。

習得知識の状況：学生が現在もっている知識の正確度を調べるために、母子保健・小児保健・育児・救急処置などに関する33の項目について○×で回答を求めた。(項目内容略)

その結果「保健」の履修との関係では、履修した場合は正答数20以上は60.0%程度であるのに対し、履修しなかったものでは26.7%と正答数が少ない傾向が見られた。「家庭科」の授業の履修と、正答数の関係でも、同様の傾向が示された。(表1.2.3.4)

育児の経験：赤ちゃん(まだ一人で歩けないくらいの子ども)とのかかわりの経験を、具体的に問う形式で質問した。項目は「母乳を飲ませているのを見たことがある」「赤ちゃんの便を見たことがある」「抱っこ」「着替えをさせる」「離乳食を食べさせる」の5項目。

最も経験率の高かった項目は、「抱っこ」81.5%、最も少なかったのは「離乳食」25.9%。

いずれの項目も、男子より女子の方が経験率

が高い。

それらの経験の時期は、半数以上は幼児期から小・中学生期であり、高校及び高校卒業以降に経験したもので多かったものは「抱っこ」

「おむつ・着替え」の43.9%、「世話をした赤ちゃん」は、親戚の子どもや、自分の弟・妹の場合が多く、「経験した場所」は、自宅やその子どもの家が多い。

「赤ちゃんの泣き声をどのように感じるか」の設問では、女子では「うるさい」21.2%「かわいい」26.1%、「かわいそう」7.8%、「何とも思わない」25.0%。

考察

高校時代の「保健」や「家庭科」の授業での育児についての履修状況は、必ずしも満足したのではない。また日常生活における育児の実際との接触も少ないようで、このことがやがて子どもを知らないままに、あるとき母親になるという現状をつくり出していくことになる。

【II】母親たちは育児情報をどのように受け止めているか

A 総論：質問紙によるアンケート調査から

調査方法

対象：0～3歳児を持つ母親

方法：健診時や集会時に配布し、任意郵送法

地域：都内及び三多摩・千葉・神奈川県と静岡県焼津市

期間：1993年10～11月

有効票：740通（板橋区内5保健所501・こ

どもの城109・情報教育研究所85・

焼津市立総合病院45)

配布数：2853通

回収率：25.9%

調査対象者の属性

子どもの性別は、男児52.8%・女児47.2%、月齢は4ヶ月・1歳6ヶ月・3歳がピーク。

母親の年齢は、20代後半と30代が全体の13.0%で、平均年齢は30歳。父親は30歳代前半が42.0%と集中しており、平均年齢は33歳。

母親の職業は専業主婦79.2%、常勤9.7%、パート7.7%。

持ち家率は29.3%。住居形態ではアパートやマンションなど集合住宅に住む家族が77.2%。三世帯同居は夫の母親とが最も多く9.6%、次いで夫の父親が7.6%。

調査結果

①現在の育児で最も気がかりなこと

- 1、アレルギー9.6%
- 2、食事の量やバランス8.1%
- 3、トイレトレーニング4.9%
- 4、食の安全性4.6%
- 5、性格や現在の態度や様子4.1%
- 6、保育園や幼稚園4.1%

保育園や幼稚園は、4～6ヶ月児でも6.5%と、この頃の気がかりの上位三番目にあげられていることが目立っていた。

②情報の入手先

情報の入手先で最も重視しているのは、近所の友人35.9%、実家の母23.0%、病院21.6%、保健所17.4%。

一番の気がかりを誰かに相談した人は73.2%で、相談しなかったもの21.5%。

相談した結果、気がかりが解消したのは24.7%、解消していない62.9%、さらに不安が高まった2.2%。

その相談先は、近所の友人50.2%、実家の母46.7%、病院の医師や看護婦29.2%、保健所の保健婦や看護婦29.0%。

以上の結果をみると、母親の育児情報網のなかで、「近所の友人」と「実家の母」が、常に大きな位置を占めている。

③主な情報源

領域別の情報源を(表5)に示した。

次に日々の育児情報の中から、特に「うつぶせ寝」「除去食」「舌小帯切除」をとりあげて、その情報源をたずねた。

うつぶせ寝：知っている人91.5%、体験者57.4%。きっかけは育児雑誌15.4%、自分の判断14.8%、育児書12.9%、友人や知人12.4%、医師7.2%。

除去食：知っている人35.2%、体験者10.8%。きっかけは医師18.3%、育児雑誌9.2%、育児書8.7%、自分の判断で6.1%、保健婦3.8%。

舌小帯切除：知っている人34.3%、体験者2.0%。きっかけは育児書14.7%、育児雑誌7.1%、友人や知人6.3%、医師3.2%、助産婦3.2%。

④影響力が強いマスコミ情報

マスコミからの育児情報の内容・種類と利用度は、妊娠・育児雑誌86.2%、テレビ番組76.4%、育児書や専門書70.0%、新聞記事43.2%、通販カタログ32.0%、生活情報紙16.9%、週刊誌13.1%、妊娠・育児ビデオ9.2%など。

マスコミ情報の信頼度は、妊娠育児雑誌66.6%、育児書や専門書59.2%、テレビ番組48.6%、新聞記事24.3%の順。

利用度も信頼度も第一位は「妊娠・育児雑誌」信頼する具体的な理由としては、「現在子育て中の人達の直接的な意見や体験情報などの事例が多く、リアルで共感できるし安心できる」など、具体的に感じとることができるという内容のものが多い。

⑤マスコミ情報は不安要因にも

不安になった内容としては「予防接種」「ショッピングな映像や記事」「アレルギーやアトピー」「他の子と自分の子との比較」「早期教育」「食の安全性」などがあげられている。

考察

育児情報としては、身近な友人や実家の母親の存在は大きい。一般のマスコミ情報は育児に役立つが、特殊な情報で惑わされることがある。母親が求めているのは、ごく当たり前の育児常識の情報であることが伺える。

B 保健所・病院における育児情報

総論のアンケート調査結果のうち、保健所・病院に関するものを整理した。

保健所(保健センター)と病院(医院)における情報

利用経験：保健所や保健センターの利用内容は、乳幼児健診77.0%、母親学級52.8%、新生児訪問47.2%、1歳児歯科健診45.8%、育児学級37.6%、育児相談(出張相談を含む)26.4%、保健婦の家庭訪問25.5%、妊婦歯科健診21.5%、電話相談16.9%。

病院・医院の利用内容：子どもの健診89.6%、子どもの診察や治療80.1%、自分の健診62.3%、予防接種59.6%、時間外救急治療14.1%、栄養相談指導11.8%など。

育児情報：与えられた育児情報でかえって不安になった経験者は、保健所・保健センター13.1%、病院(医院)13.2%とほぼ同率で、子育てグループからの14.7%や、マスコミからの23.6%に比べると少ない。

不安になった具体的な内容としては、保健所や保健センターでは、職員の接遇が多く、「保健婦・栄養士の発言で」が21.6%、具体的には「軽くあしらわれた、厳しい口調、勉強不足、不親切」などである。「他の子と比べて、他の親が立派にやっているのを見て」不安になったもの6.2%など。医師の発言内容で「おどかさされた、叱られた」6.2%。

病院(医院)では「医師の発言内容で、おどかさされた、叱られた」18.4%、「医師によって指導内容が異なる」13.3%。「不安げな表情で言われた、うやむやにされた」11.2%「他の子と比べて自分の子と違うので」7.2%。

育児不安の解消法：保健所・保健センターの場合は「真剣に聞かず、参考程度に気にしない、惑わされない」が20.6%、「自分を励まして、我が家流のやり方でした」16.5%、「友人に相談」9.3%、「医師に相談」8.2%。

育児情報で不安になった具体例及び解決法
「略」

考察

保健所や病院は、育児の情報源としての役割を担っている。その反面、不親切な発言などに

より、むしろ育児不安を持つに至った母親が、約一割強いということは、反省と共に、今後の課題である。

C 育児グループにおける育児情報

総論のアンケート調査結果のうち、「子育てグループ」に参加している母親の実態について調査した。

子育てグループへ「参加している、していた」が28.8%、参加していない70.3%で、その種類は「母親だけの全く自主的なグループ」が50.7%「児童館が主催し、指導員がいる」が35.2%、「保健所が主催し、保健婦がいる」16.6%。

グループの構成：母親だけの自主的なグループが多い。

一回の活動時間：二時間前後59.6%、三時間以上が19.7%、一時間以内が18.3%。

活動の回数：「週一回」27.2%、「月一回」が23.5%、「週二回」が16.0%「決まっていない」15.5%。

活動の内容：「自由遊び」が最も多く67.1%、その他には「プログラムにそった遊び」29.6%、「講義」12.7%、「教育的な内容をもった遊び」11.7%。

グループへの参加動機：「友人に誘われて」38.0%、「自分達で作った」25.8%、「広告紙やチラシで」19.2%。

グループへの参加理由と、参加して良かった点：参加理由は「必要な子育て方法を積極的に得るために」57.3%、「毎日の生活が退屈」28.2%、「ひとりだけの育児が不安」23.0%。

参加して良かったと感じる人は98.1%で、理

由は「いろいろ情報交換ができる」78.5%、「気分転換になる」75.1%、「子どもの友達ができた」63.2%、「他の親子の遊び方が参考になる」53.1%。

子育てグループの育児情報で不安：グループに参加したことによって「かえって不安になった」14.7%、「ならなかった」56.2%、「不明」12.7%。

不安の具体的な内容としては、「他の子と自分の子を比較して、他の子の方が素晴らしい」など他との比較が多く29.4%、その他離乳食や断乳、早期教育、予防接種、アレルギーなどがある。

グループインタビューの結果

「こどもの城」の育児グループ「赤ちゃんサロン」に参加している親9人を対象としてインタビューし、情報を実際の育児に応用するときの「子育て仲間」の役割について、詳しく聴取し、検討した。(略)

考察

ひとつの情報が、受け手側の性格や精神状態、ストレスの有無などによって、不安を解消させたり、助長させたりすることがあるが、友人との交流や育児グループへの参加は、ストレス解消につながり、母親に自信を待たせ、不安を解消させる方向に向かわせている。そして多くの情報の入手先が友人、知人であることを考えれば、情報を発信する側も、これらの集団を利用するのが効果的であろう。今後このような育児グループが各地域で誕生することが望まれる。

D 電話相談からみた育児情報

母親が電話相談をする動機となった原因のうちで、「医師やその他の専門家の言葉」による場合が最も多いので、これを取り上げて整理し、その対応について検討した。

対象は1993年12月の一ヶ月間に、ダイヤルサービス(株)の育児相談である「エンゼル110番」「赤ちゃん110番」に入った電話相談のうち、医師やその他専門家の指導内容の何らかが、原因となった例を選択した。

その件数は660件であり、それは一ヶ月間2561件のうちの25.8%を占めている。母親の育児を不安にさせた情報の提供者と、その内容を分類したのが(表6)である。

内容は、病気・症状に関するものが多く、母親が最も心配を抱きやすく、判断しにくいものであることがわかる。

全体に情報の提供の仕方が多いパターンは「断定的・命令的」「説明不足・脅迫的」な表現となっており、これは医師及びマスコミに共通している。一方通行のマスコミによる情報発信が、これらのパターンに陥りやすいことは理解できないが、医師にもこのパターンが多いことは、医師がとすれば一方通行になりがちであることを意味していると思われる。

医師以外の専門家(保健婦・看護婦・栄養士等)に見られるパターンは、「母親を否定する表現」が多い。これは専門家が母親と接するのは、主に健診であり、そこでは

- 1) 相手に喜んでもらうために、サービスをするという意識がうすい。
- 2) 問題の原因を母親に求める傾向が強い。
- 3) 話される内容が、躰け、生活など価値観が

からむ問題であることが多い。

などから、こうした表現で説得する形になりやすいものと思われる。

また「知人や家族」は、脅迫的、不確実な情報、あるいは価値観を押しつけるパターンに陥りやすい。本人との関係の近さが、これらのパターンをとりやすいものと推察される。

<具体例>

断定的、命令的

(五ヶ月・男児6.8Kg、ミルク800～1000ml/日)

ミルクにしてからよく吐くので、小児科を受診。

「5ヶ月くらいなら1200～1400mlは飲むはず、便が1～2日に一回では便秘だ」

説明不足

(6ヶ月・男児7.2Kg、4ヶ月で寝返り、6ヶ月でハイハイし、つかまり立ちも始める。)

4ヶ月健診で股関節脱臼の疑いで整形外科受診。

「股関節脱臼ではないでしょう。でも股関節に負担のかかるようなことはさせないで下さい。」

脅迫的

(3ヶ月・女児)

もらった薬を飲まないで、再度小児科へ相談に行った。

「とにかく飲ませなくては。薬を飲まなくては治らないから。ミルクでも何でも混ぜちゃってかまわないから。治らなくていいんですか。」

母親を否定

(1歳6ヶ月・女児)

1歳半健診で保健婦の指導。

「言葉も遅いし、運動のほうも遅れていますよ。とにかくお母さんの今までの育て方じゃダメ」

不用意

(2ヶ月・男児)

小児科受診

「人工栄養の子で、緑のうんちが出るのは非常に珍しい。風邪気味かもしれないので、入浴、外出は控えること。水薬や粉薬を混ぜて与えるように」母親は一日一回くらい緑便が出るが、他に変わったことはないから安心して受診したのに、かえって心配になってしまった。

考察

定期健診や育児指導の体制がとられていても、そこで指導や相談にのる医師や専門家の対応が問題である。電話相談は何時でも何処からも、相手に見られないで相談出来るので、このような苦情を聞くことがある。医師などの保健指導にあたっては、相手の生活感覚を理解し、感情をくみとった心温まる対応を期待したい。

E アトピー性皮膚炎と育児情報

アトピー性皮膚炎については、多種多様な情報が氾濫している。そこで1993年の5月の一ヶ月間に、焼津市保健センターで行われた乳幼児健診(2ヶ月児、1歳児、1歳6ヶ月児、3歳児)を訪れた母親を対象として、アトピー性皮膚炎についての調査を実施した。対象は来所した母親325名である。

アトピーという言葉の周知状況：周知率は98.8%で、聞いたことがないと答えたものはわずかに4名である。

アトピーという言葉の由来：アトピー性皮膚炎という言葉の省略62.6%、一種の過敏性体質のこと19.6%、食物アレルギーのこと7.5%。

子どもがアトピー性皮膚炎と診断された経験： すべきか、意見が分かれるところである。
経験のあるもの17.8%、経験者82.2%。

経験者57名のうち、現在治療中は33.3%、治療を受けて治ったもの26.3%。

アトピー性皮膚炎と言われていない子どもに対して：母親の目から見ると、アトピー性皮膚炎と思うもの14.8%である。

食事制限に対する意識：食事制限を必要としないと答えたものは、経験者1.8%、未経験者0.8%で、ほとんどの母親は食事制限が必要と答えている。

考察

アトピーが母親の育児不安の一因になっていると指摘されているが、雑誌・テレビなどでの扱われ方が、不安を増長させているのではないかと考える。

【Ⅲ】育児情報の質の検討

電話相談で高い頻度で聞かれる親の質問より20問の代表的なものを選択し、その中から本研究班で10問にしばって、その対応の仕方をアンケート調査した。

対象は保健婦・看護婦・電話相談員・学生・研修医である。

その結果は、表7、8である。

考察

育児における「正しい情報」は一つと限らない。しかしそのことが、孤立して不慣れな育児を行っている母親の不安を増す要因となっている。本調査の結果もそのことに関係しているが、これを止むを得ぬものとするか、あるいはこのようばらつきをもっと少なくする方策をとる

一方、医学的な要素の強い育児行為については、きっちりした標準的な方法を確立してもよいかも知れない。「哺乳ビンの消毒」「舌小帯」「便秘」などについては、科学的なデータをもとに、統一見解を出すことも可能であろう。このような育児を整理し、考え方をまとめることは、例えそれがひとつの理論として求められないことがあっても、多くの専門家がそれらに関心を持つことで、育児にゆとりある幅を持たせ、母親たちを安心させるであろう。

【Ⅳ】育児情報はどのように提供したらよいか

母親が育児情報をどのように受けとり、情報のどのような点で混乱したかを調べ、母親に混乱を生じさせることなく、また有効に育児情報を提供する方法を探ることを目的として研究中である。

方法：母親に「模擬情報」を提供し、母親はその情報のどれが理解しやすいか、どの点で混乱を生じるかを調べる。情報の混乱は多くの場合、誤った情報が発信されていたり、情報の発信者の態度が適正でなかったことによると考える。模擬情報を作成するに当たっては、「説明が十分」「不十分」「但し書きが加わったために、かえって不安を招く」あるいは「不明瞭になっている」という条件を負荷した。

模擬情報の具体例として「体重」「肥満」「アトピー性皮膚炎」「言葉の発達」を取り上げた。

現在「模擬情報」を作成し、母親への「アンケート調査用紙」を作成中である。

表1. 保健の履修別正答数 (女子)

	3学年通じて2学年		1学年のみ		なし	不明	合計
0～9	1: 2.0%	3: 1.1%	0: 0.0%	0: 0.0%	0: 0.0%	0: 0.0%	4: 0.8%
10～14	0: 0.0%	2: 0.7%	3: 2.3%	0: 0.0%	0: 0.0%	0: 0.0%	5: 1.1%
15～19	19: 38.8%	106: 37.6%	52: 40.6%	11: 73.3%	0: 0.0%	0: 0.0%	188: 39.5%
20～24	28: 57.1%	164: 58.2%	66: 51.6%	3: 20.0%	1: 50.0%	1: 50.0%	262: 55.0%
25～27	1: 2.0%	7: 2.5%	7: 5.5%	1: 6.7%	1: 50.0%	1: 50.0%	17: 3.6%
合計	49: 100.0%	282: 100.0%	128: 100.0%	15: 100.0%	2: 100.0%	2: 100.0%	476: 100.0%

表2. 家庭科の履修別正答数 (女子)

	3学年通じて2学年		1学年のみ		なし	不明	合計
0～9	2: 1.9%	1: 0.3%	1: 1.7%	0: 0.0%	0: 0.0%	0: 0.0%	4: 0.8%
10～14	0: 0.0%	2: 0.7%	3: 5.0%	0: 0.0%	0: 0.0%	0: 0.0%	5: 1.1%
15～19	48: 45.3%	113: 37.5%	23: 38.3%	4: 50.0%	0: 0.0%	0: 0.0%	188: 39.5%
20～24	52: 49.1%	178: 59.1%	28: 46.7%	3: 37.5%	1: 100.0%	1: 100.0%	262: 55.0%
25～27	4: 3.8%	7: 2.3%	5: 8.3%	1: 12.5%	0: 0.0%	0: 0.0%	17: 3.6%
合計	106: 100.0%	301: 100.0%	60: 100.0%	8: 100.0%	1: 100.0%	1: 100.0%	476: 100.0%

表3. 育児経験とその時期

	時期 (ありの中の%)						
	幼児期	小学校 低学年	小学校 高学年	中学校	高校	高校卒 以降	無回答
母乳	17.0%	22.5%	21.8%	12.0%	14.8%	11.3%	0.8%
便	16.9%	23.4%	16.9%	12.2%	16.3%	13.8%	0.6%
抱っこ	6.1%	14.3%	18.9%	15.4%	25.9%	18.0%	1.4%
おむつ・着替え	10.0%	19.4%	14.4%	11.7%	20.6%	23.3%	0.6%
離乳食	14.0%	16.9%	19.1%	13.2%	16.2%	20.6%	0.0%

表4. 育児経験「あり」としたものの

	全体	女子	男子
母乳	400: 76.2%	364: 76.5%	32: 71.1%
便	320: 61.0%	297: 62.4%	20: 44.4%
抱っこ	428: 81.5%	394: 82.8%	31: 68.9%
おむつ・着替え	180: 34.3%	173: 36.3%	5: 11.1%
離乳食	136: 25.9%	132: 27.7%	4: 8.9%
N=	525:	476:	45:

表5. 領域別育児情報の入手先順位

領域	内容	順位				
		1	2	3	4	5
授乳・離乳食	授乳・離乳食全般	保健所 45.9%	近所の友人45.8	育児雑誌 45.0	育児書 34.7	実家の母 31.8
	ミルクや栄養剤	保健所 40.1	近所の友人31.6	育児雑誌 30.7	育児書 26.9	病院 21.2
	食の安全性	育児雑誌 27.8	保健所 20.7	近所の友人19.9	新聞 16.8	テレビ 15.5
	断乳・哺乳瓶	近所の友人30.8	育児雑誌 24.7	保健所 21.8	育児書 19.6	実家の母 17.6
体の気	体の気かり全般	病院 57.4	近所の友人42.4	保健所 39.5	育児雑誌 35.1	育児書 32.3
	アレルギー	病院 47.2	育児雑誌 22.3	育児書 20.1	保健所 20.0	近所の友人17.2
	体の発達	病院 43.0	保健所 32.6	近所の友人25.5	育児書 24.9	育児雑誌 22.4
	睡眠や泣き	近所の友人32.7	実家の母 23.5	育児雑誌 21.8	育児書 18.4	保健所 17.4
育児用品	育児用品全般	近所の友人48.6	育児雑誌 47.0	近所の友人29.2	親戚兄弟 19.2	育児書 18.8
	紙おむつ	近所の友人41.4	育児雑誌 30.7	近所の友人21.9	テレビ 12.4	親戚兄弟 11.8
	乳首や哺乳瓶	育児雑誌 28.1	近所の友人26.4	近所の友人15.0	親戚兄弟 10.4	保健所 10.0
	おもちゃ	近所の友人21.4	育児雑誌 15.4	近所の友人 6.2	百貨店スーパー 6.1	親戚兄弟 5.8
しつけ・教育	しつけ・教育全般	近所の友人45.8	育児雑誌 43.1	実家の母 33.1	育児書 30.9	近所の友人22.3
	食事のしつけ	育児雑誌 30.4	近所の友人28.9	実家の母 28.5	育児書 21.1	保健所 16.6
	トイレトレーニング	近所の友人33.2	育児雑誌 31.8	実家の母 19.7	育児書 18.6	近所の友人13.6
	乳幼児教育	育児雑誌 30.9	近所の友人28.0	育児書 16.8	近所の友人13.8	実家の母 11.5

※数値は%、保健所は保健所の保健婦や栄養士、病院は病院の医師や看護婦、親戚兄弟は母や姑以外の親戚。

表6.

上段：件数
下段：(%)

発信者	内容	食 事	病 気	発 育 ・ 発 達	し ・ つ 情 緒	生 活	計
医 師		42 (6.3)	103 (15.6)	35 (5.3)	7 (1.1)	0 (0.0)	187 (28.3)
医師以外の 専 門 家		14 (2.1)	35 (5.3)	35 (5.3)	21 (3.2)	7 (1.1)	112 (17.0)
知人・家族		35 (5.3)	66 (10.0)	21 (3.2)	48 (7.3)	27 (4.1)	197 (29.9)
マスコミ		41 (6.2)	62 (9.3)	27 (4.1)	7 (1.1)	27 (4.1)	164 (24.8)
計		132 (19.9)	266 (40.2)	118 (17.9)	83 (12.7)	61 (9.3)	660 (100)

育児相談への対応に関するアンケート

表7.

- 問1 生後3カ月の男の子ですが、直径が2CMもあるでべそがあります。姑が十円玉をテープで張り付けておけばよい、と言っているのですが、どうすれば良いのでしょうか？
- 問2 4カ月の男児です。よくぐずって泣きます。抱き上げると泣きやむのですが、友達から抱き癖がつくからよくないと注意されました。あまりしょっちゅう抱いてはいけませんか？
- 問3 7カ月女児です。指しゃぶりがひどく、親指がふやけて真っ白になっています。あまり指しゃぶりがひどいと、歯並びにも影響すると言われました。どうすればよいでしょう？
- 問4 生後2カ月です。舌小帯が短いといわれ、保健婦さんからお医者さんで切ってもらいなさいといわれました。ミルクの飲みもいいのですが、舌小帯は切らなくてはいけませんか？
- 問5 最近新聞でうつ伏せ寝は、乳児突然死の引金になるという記事を読みました。私の5カ月の子どもは、生まれてからずっとうつ伏せ寝で育ててきました。仰向け寝にかえる必要がありますか？
- 問6 生後3カ月です。最近便秘がひどくなり、4～5日に一回しか排便がありません。便がかたときどき排便のときに痛むらしく大泣きします。かわいそうなので市販の洗腸をときどきしていますが、洗腸は癖になるからやめた方がよい、といわれました。どうしたらいいでしょう。
- 問7 9カ月の男の子。もともとカンの強い子でしたが、最近ほとんど毎晩夜泣きをします。抱けば泣きやんで寝てくれるんですが、毎晩なのでクタクタです。なにかいい方法はないのでしょうか？
- 問8 3カ月の乳児がいます。ミルクで育てていますが、哺乳瓶の煮沸消毒はいつまで続けなくてはいけなんでしょう？ほかの食器と一緒に洗うだけではいけませんか？
- 問9 母乳で育てています。このあいだ手を包丁で切ってしまい近くの外科医院で抗生物質をもらいました。授乳中の母親の飲んだくすりは母乳中にのって聞きましたが、母乳は中断しなくてはいけませんか？
- 問10 3カ月の女児です。生まれた時から便利なので紙オムツを使っています。このあいだ夫の実家に行ったんですが、お姑さんから「紙オムツだと、オムツのとれるのが遅くなる」といわれ。布オムツをすすめられました。お姑さんの言ったことは本当ですか？

表8. 対象者

対象	人数	年齢	子どもあり
保健婦(1)	42	40.1	22
保健婦(2)	9		5
看護婦	18	31.4	8
電話相談員(1)	25	46.4	22
電話相談員(2)	9	45.4	8
学生(言語療法士)	26	24.3	0
研修医	10		0

図1

	保健婦	看護婦	電話相談員	学生	研修医
止めた方がよい	43	5	33	23	5
やった方がよい	4	3	1	2	2
医療機関受診を勧める	7	13	0	9	3
不潔になる	22	2	25	7	2
いづれ治る	13	5	27	10	4
始への配慮	1	1	1	0	0

図2

	保健婦	看護婦	電話相談員	学生	研修医
抱いてあげてよい					
抱き癖はつかない	4	5	4	3	4
抱き癖はつく	5	1	6	4	1
コメントなし	25	10	8	14	4
抱いてはだめ	0	1	0	0	0
時間があれば抱いてあげる	10	0	12	2	0
抱き癖は悪いことではない	5	0	0	0	0
抱くことは重要	5	2	5	1	0
まず泣く原因の検索	13	3	4	1	0
方っておいてよい	1	1	5	0	0

図3

	保健婦	看護婦	電話相談員	学生	研修医
方っておいてよい	18	4	10	5	2
止めさせた方がよい	0	0	0	4	0
歯並びに影響あり	5	2	7	1	0
歯並びに影響なし	11	3	16	5	3
おしゃぶりを与える	1	3	2	11	1
手遊びをする	6	0	4	0	0
声かけ、相手をする	24	0	15	5	0
気分転換をはかる	3	2	8	1	0
手鏡、包帯をまく	0	0	0	4	3
辛子を塗る	0	1	0	4	0

図4

	保健婦	看護婦	電話相談員	学生	研修医
切るべき	0	2	0	1	0
程度によっては切る	0	3	1	0	1
一概に言えない	4	0	5	2	0
切るべきではない	44	7	26	23	8
医師に相談する	20	11	26	1	0

図5

	保健婦	看護婦	電話相談員	学生	研修医
うつ伏せのままよい	45	16	31	13	5
仰向けにする	2	0	0	5	1
心配なら仰向けにする	4	0	1	2	0
どちらでもよい	4	1	3	5	2
うつ伏せの方がよい	0	1	0	0	0
(理由)寝返りできるから	22	5	16	3	0
寝めの布巾に寝かせる	3	2	1	1	0

図6

	保健婦	看護婦	電話相談員	学生	研修医
深睡してよい	10	0	3	5	7
止めた方がよい	4	2	6	3	0
マルツエキス、果汁	32	6	24	1	1
水分補給	18	3	3	3	2
腹部マッサージ	29	5	11	5	0
綿褲、こより	17	11	15	3	2
肛門オリーブ油	1	1	6	0	1
薬使用	2	2	1	2	0
最終手段として止むを得ない	13	3	9	5	0
自然排便を待つ	2	2	6	0	1
医師に相談	7	8	12	13	0
まず原因を追及する	20	3	12	6	1

図7

	保健婦	看護婦	電話相談員	学生	研修医
昼間身体を動かして疲れさせる	30	8	27	15	5
深い寝をする	8	3	7	0	0
父親(家族)の応援を頼む	12	1	3	6	2
つきあうしかない	6	3	6	6	1
水分を与える	3	1	6	0	0
母親が子供と寝寝をする	11	3	5	3	1
睡眠環境のチェック	8	2	11	2	0
睡眠にリズムをつける	7	1	4	0	0
入眠前の興奮を避ける	6	0	6	0	0
そのまま放っておく	1	2	3	2	2
寝寝を短くする	0	7	6	6	0
薬を使用する	1	0	0	3	0
おもちゃを与える	2	0	0	1	0
いづれなくなる	12	3	12	5	2
原因の検索を行う	7	1	6	1	0

図8

	保健婦	看護婦	電話相談員	学生	研修医
消毒の必要なし	25	7	27	7	5
消毒の必要あり	2	0	1	5	0
3~4ヵ月まで	2	2	3	0	0
5~6ヵ月まで	7	5	0	1	2
産乳確立まで	3	1	0	8	1
1才まで	0	1	0	2	1
哺乳瓶使用中はずっと	5	0	0	3	0
夏場のみ	2	1	0	0	0
消毒液使用推奨	3	6	0	0	0

図9

	保健婦	看護婦	電話相談員	学生	研修医
授乳を中断する	5	3	2	18	1
授乳は続けてよい	18	3	18	5	7
授乳直後に服用すればよい	1	0	15	0	0
医師に相談する	33	12	20	6	2
薬は母乳中に排泄される	6	0	6	0	0
血中濃度について説明	0	0	4	0	0

図10

	保健婦	看護婦	電話相談員	学生	研修医
おむつ取れ遅れない	26	10	27	17	5
おむつ取れ遅れる	3	2	1	5	3
個人差が大きい	3	1	7	0	0
布おむつにすべき	3	1	2	0	1
布と紙の使い分け	10	4	2	3	2
親次第	7	4	1	1	0
どちらでもよい	5	0	0	0	0
こまめに取り替える	15	1	2	2	0
(紙だと) 親の努力遅れる	6	0	2	0	0



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



【要約】育児はごく普通の生活のなかで行われている。母親は、地域社会でいろいろな人の知恵を借りながら、立派に育児をなしとげていた。しかし近頃は育児環境が孤立化してきたために、育児の常識を知らないままに母親になるものが増加してきている。日常の育児相談・育児指導などで母親の育児を観察したり、また、質問項目を整理すると、子育ての基本の知識がゼロというような例に遭遇することさえある。

一方マスコミを通じての育児情報が氾濫している。しかしその多くは、衆目を意識した内容であるから、母親は特殊な育児情報に取り囲まれているといっても言い過ぎではないであろう。即ち当たり前の育児知識が希薄であり、特殊な情報を育児常識として子育てが行われているという現状である。

そこで本研究では、母親が学校教育を受けたときの保健と家庭科の授業にまでさかのぼって調査し、また現在の育児常識の実態を分抗した。そのうえで現状の育児情報のあり方を整理し、これからの保健指導のあり方について検討した。